

小学校英語教育必修化

－日本語と英語の接点－

氏名 松本知子
所属専攻 発達と教育

報告書概要

中学から6年あるいは10年、英語を学習しても身につかなかったその原因は解明されないまま、小学校英語教育がいよいよ実施されそうだ。留学生らへのインタビューによると、日本人の英語力は問題ないと感じられているが、英語が話せても使いたがらないことが不思議だとも思われている。小学校英語教育の実験校でクラス担任やALTと協力して授業を行っている補助者のインタビューからは、授業の進め方、学習に対する考え方など、学校の中に入ってみなければわからない学校特有の文化があることがわかった。日本の学校文化の中には「伝統としての教育」の教育観があり、生徒が生き生きとした英語に触れることを阻んでいると考えられる。小学校で、「伝統としての教育」の良さを生かしつつ、生徒が生き生きとした英語に触れることを可能にするには、英語を体験的に学んできた補助者の存在が鍵となる。

目次

はじめに	1
1. 『英語が使える日本人』に必要なもの	3
1.1 世界の言語	
1.2 英語が話せないアメリカ人	
1.3 未来の予測は不可能	
2. フィリピンと韓国：英語へのスタンス	7
2.1 フィリピン	
2.1.1 フィリピンの教育	
2.1.2 フィリピンの教育の歴史	
2.1.3 フィリピンの教授用語	
2.1.4 留学生のMさんの話	
2.2 大韓民国（韓国）	
2.2.1 韓国の英語教育の歴史	
2.2.2 韓国の教育制度	
2.2.3 韓国の英語教育	
2.2.4 留学生のYさんの話	
3. 日本人の「英語との距離」	19
3.1 学校英語教育の悪循環	
3.2 英語と日本語との言語的な距離と習得にかかる時間	
3.3 生きた英語習得に熱心になれない理由	
4. 早期英語教育に対する意見	23
4.1 同じ漢字圏の国でも英語学習の負担感には違いがある	
4.2 賛成意見と反対意見	
5. 実験校での小学校英語教育	28
5.1 英語の授業風景	
5.2 Tさんの話	
6. 日本の教育もう一つの側面	33
6.1 何のために英語を学ぶのか	
6.2 伝統芸能と日本的な教育	
6.3 ある箏曲社中の師範養成制度	
6.4 学校の中の伝統的な教育観	
7. まとめ	38
8. 謝辞	38
巻末注	43

はじめに

2007年10月30日、中央教育審議会は、次期学習指導要領の大枠を決定し発表した。それによると、小学校では必修科目として5年生から英語の学習が導入される。2011年度にも実施されるもようだ。今後一般から意見を募った上で2008年はじめに正式な答申を取りまとめ、3月末までに次期指導要領を告示する。これに先立つ2003年3月31日、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会外国語専門部会委員の答申として「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」（以下『英語が使える日本人』と記す）」が報道発表された。遠山敦子文部科学大臣は『英語が使える日本人』策定について、日本人の英語能力向上が喫緊の問題となっているとして、その背景を、グローバル化、メガコンペティション、国境を越えた問題、知識社会等のキーワードを使い、次のように説明した。『国際社会のグローバル化により、人、物、情報、資本の移動が活発になり、国際的な競争が激しくなってきた(メガコンペティションの世界)。その中で日本人が生きるにあたって「国際社会を生きるという広い視野とともに、国際的な理解と協調は不可欠」になってくる。世界には国境を越えた問題が発生しており、日本も国際社会の一員として世界の国々と協力して問題解決にあたらなければならない。世界は知識が価値を持つ社会(知識社会)に変化しようとしている。そのために、インターネットや語学を駆使して知識や情報を入手、自ら情報を発信し対話する能力が必要になってくる。また、グローバル化による恩恵を受け、生活を豊かにするためにも、今後、個人の語学力が役立つようになってくる。日本人が21世紀を生き抜くために「国際的共通語としての英語のコミュニケーション能力を身に付けることが不可欠」だ。また、日本国民が英語でコミュニケーションを計ることが出来るようになることは「我が国が世界とつながり、世界から理解、信頼され、国際的なプレゼンスを高め、一層発展していくためにも極めて重要な課題」だ。』

『英語が使える日本人』では、英語能力の向上は国家の戦略としてだけでなく、個人の福祉のためにも重要な課題であることを指摘し、以下のような施策を実行するとした。

1. 英語の授業の改善
2. 英語教員の指導力向上及び指導体制の充実
3. 英語学習へのモチベーションの向上
4. 入学者選抜等における評価の改善
5. 小学校の英会話活動の支援

6. 国語力の向上
7. 実践的研究の推進

当初は小学校の「英語活動」への支援を行うとしていたが、今回発表の学習指導要領の大枠では、英語を小学校必修科目として導入することとされている。

小学校で英語が教えられることになれば、中学・高校での英語の時間に加え、小学校での学習時間が加わり、日本人の英語能力の向上が期待できる。小さなうちから外国人の先生に本格的な英語を習えば、成長した暁には海外留学、卒業したら英語を操り外国でビジネス、海外旅行も旅行会社のお仕着せでなく自由に世界中を旅することが出来る。未来の若者の世界は一気に広がるだろう。しかし、小学校での英語教育には反対の声もある。特に英語教育関係者から、反対が多い。英語を教えることになる小学校の教員たちの反対も強い。次期学習指導要領では小学校英語教育が開始されることに決定され、子供を持つ親たちも英語教育導入に賛成しているにも関わらず、肝心の英語の専門家や教員たちが反対なのはなぜだろうか。海外からは日本人の英語は下手だという批判の声が聞こえてくる。世界がグローバル化して英語の能力は今すぐにでも欲しいという切羽詰まった状態のこの時期に至っても議論が続いている。

「6年間あるいは10年間も勉強したのに、手紙一つ書けない」と嘆かれる日本人の英語能力。アジアの国々は英語教育に力を入れ、優秀な学生が英語を武器に世界で活躍している。日本の子供たちはどうしたら、それら、アジアの国々の子供たちのように熱心に勉強をするようになるかと、関係者は各国を訪問して研究を重ねている。大人は自分はもう遅いと諦め、若い世代に期待を寄せる。しかし、自分の英語学習の挫折の検証もせず、どうして失敗したかもわからないまま、子供に英語学習を押し付けるのでは失敗を繰り返すことにならないだろうか。何事においても成功の秘訣は、今居る場所を確かめ、目指すゴールを設定し、最良の策をしっかりと考えた上で行動することにある。今の大人たちの英語苦手意識は何に起因するものなのだろうか。小学校の英語教育義務化によって子供たちの将来にどのようなメリットが望めるのだろうか。子供たちの未来が世界に開かれるために「今」出来ることは何かを考えてみた。

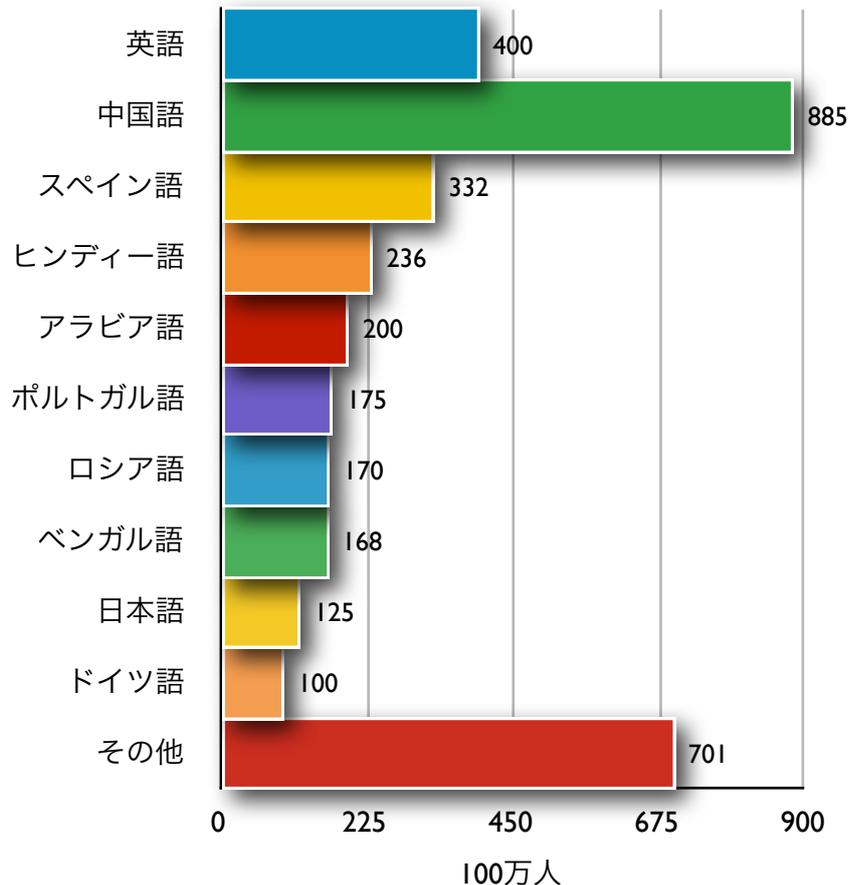
『英語が使える日本人』に必要なもの

小学校で英語が必修化され、英語を小学校から習い始める子供が、大人になって、社会で活躍するようになるのは、今からおよそ20年後になる。『英語が使える日本人』では英語によるコミュニケーション能力を持つことが「不可欠」、「きわめて重要」と述べているが、20年後の世界の言語の状況はどのようになるだろうか。

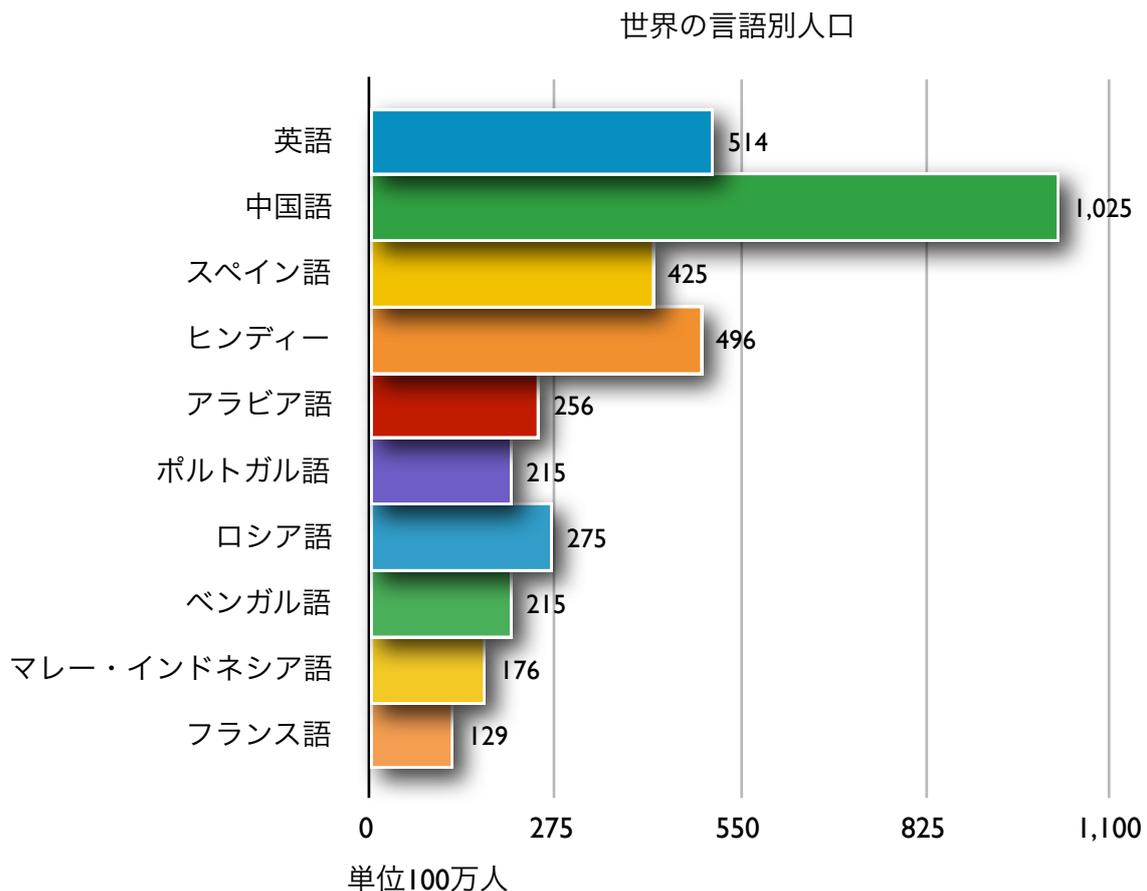
世界の言語

まず、国際語について考えてみる。国際語は、世界で多くの人と話していること、先進国で通用すること、多くの国で公用語とされていることを考えると、第一に挙げられるのは英語である。他の言語では、母語とされる言語ランキングでは中国語が最も多く88500万人、2番目が英語40000万人、3位以下はスペイン語、ヒンディー語、アラビア語、ポルトガル語、ロシア語、ベンガル語、日本語、ドイツ語とつづく。The Penguin FACTFINDER(2005)

世界の言語ランキング



世界でどの言語を使う人が多いかのランキングでは、やはり中国語が1位で107500万人次いで英語が2位で51400万人、ヒンディー、スペイン語、ロシア語、アラビア語、ベンガル語、ポルトガル語、マレー・インドネシア語、フランス語とつづく。ⁱⁱ英語は世界の中で重要な言語ではあるが、世界で一番話されている言語というわけではない。世界には多様な言語があり、その数は数えきれないと言われている。



英語が話せないアメリカ人

英語のネイティブ・スピーカーと言えばアメリカ人を思い浮かべるが、2005年の調査でアメリカの人口（約2億9600万人）の14%は家庭でスペイン語を話していることが判明した。3年前の人口調査の際は12%だったので、スペイン語を話すアメリカ人がわずかな間に大幅に増加していることがわかる。スペイン語話者のうち半数近くは英語が話せない。これら、スペイン語を母語とするアメリカ人はヒスパニックあ

ケーションを図るには、語学能力に加え、自分とは異なった文化に興味を持ち、受け入れる態度が必要だ。

未来の予想は不可能

ウィンドウズ95が発売された1995年はインターネット元年と言われている。イギリスのネットクラフト社ivの調査によると、1995年8月に約1万8000だったインターネット上のサイト数は、2007年10月の調査で、1億4200万を突破した。9月より760万増え、先月に引き続き5%以上の伸び率を示した。この10年のインターネットの拡大とともに、英語は情報技術の分野だけでなく、政治や経済の分野においても世界で重要な言語となってきている。インターネットがアメリカの軍事技術を基に作られ、アメリカ国内で最初に普及したことを考えれば当然の成り行きである。しかし、ブログの投稿数に関して言えば日本語も英語に負けてはいない。日本ではブログを書くことが最近流行しているが、2006年にブログの投稿数がアメリカをしのぎ1位になった。英語は今後も世界的に重要な言語として世界の人々に使われると考えられるが、インフラが整い、世界中の人々が情報発信を始めたとき、その人たちが何語で、どのような情報を発信するのかはわからない。

世界のブログのなかで日本語がダントツ1位！

R25(2007.07.19)

世界のウェブサイトの約8割は英語で書かれているが、ブログへの投稿は日本語が英語を抜いて1位になった。ブログ検索会社のテクノラティ社の調査によると、06年第4四半期において、世界に約7000万のブログが存在し、1日あたりの投稿数は150万。そのうち、日本語のブログ投稿数は全体の37%で1位、英語は36%で2位だった。http://r25.jp/

現在、インターネットで情報の送受信をするには、掲示板、ホームページ、ブログ、ソーシャルネットワークサービスなどが利用できる。以前はパソコンがないとアクセスが出来なかったが、最近は携帯電話でもインターネットを閲覧できるようになった。通信技術は日々進化している。情報の交換がスムーズになればなるほど変革のスピードも速くなる。科学技術は今、変革の端緒についたばかりと言われているのだ。現在、世界で英語によるコミュニケーションが重視されているのは、技術革新の結果であってその逆ではない。柔軟性と好奇心をもって急激な技術の変化についてゆくのも、これからの時代を生きる人々が持つべき重要な資質と言えよう。

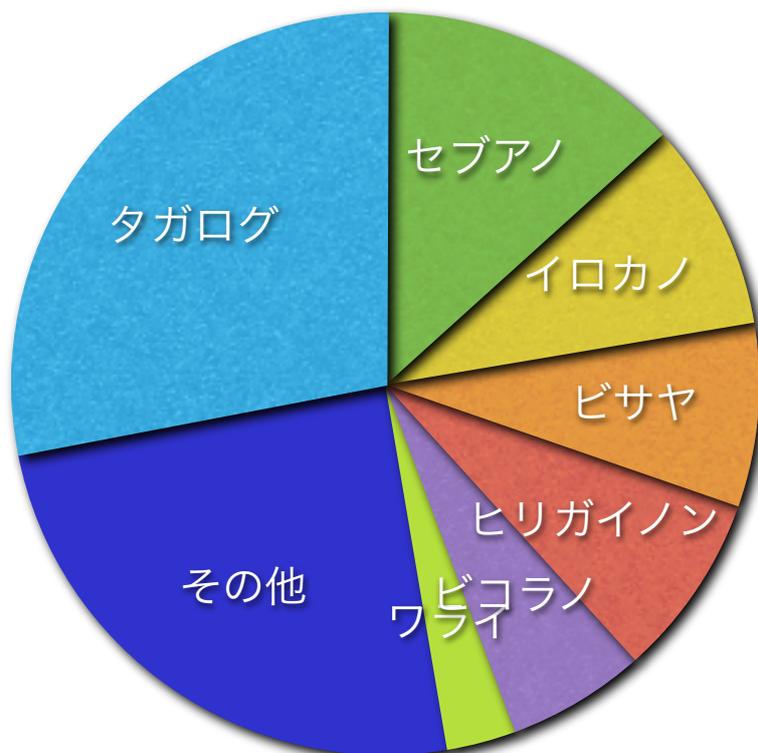
フィリピンと韓国：英語へのスタンス

30年以上バイリンガル教育を実施してきたフィリピンと、日本語と文法の似ている言語を持つ韓国の人々がどのような動機で英語を学んでいるか、英語学習の問題点などについて聞いてみる。

フィリピン

フィリピンは多民族国家である。国語はフィリピノ語^{vi}で、公用語はフィリピノ語と英語である。フィリピノ語はタガログ語を基にして作られた言語で実質タガログ語と同じ言語だ。タガログ語を日常語として使用している人は、全体の4分の1以上の28.15%、次いで、セブアノ語の13.14%、イロカノ語の9.07%の順となる。(2000年)他に、170以上の言語がある。互いの言語は方言というには違いが大きく、互いに意思の疎通が出来ない。ただし、学校教育の普及によりフィリピノ語を話す人が増えたことと、人口の急激な増加による人々の都市への転入によりフィリピノ語を話す人が増えている。

フィリピンの民族別人口



フィリピンの教育

フィリピンでは国全体でフィリピン語と英語のバイリンガル教育を実施し、30年の歴史を持っている。子供は小さいうちは家族の話す母語で育ち、少し大きくなると地域の言葉を学ぶ、学校に入ると小学校2年までは地域の言語、3年からはフィリピン語と英語で教科を学ぶ。中学に入ると学校内で使われる言語は英語のみになる。

フィリピンの教育の歴史

フィリピンの学校教育は1863年、7歳から12歳までの無償義務教育がスペイン統治下で実施されたときに始まる。スペイン語が必修とされ、学校内での母語使用が禁止された。アメリカ領有が始まり、1901年、学校では教授用語が英語のみに制限される。1942年から1946年の日本敗戦まで、日本軍政下では日本語、マニラ・タガログ語が学校で使用された。1947年アメリカの領有に戻り、バイリンガル教育政策が発表され、文系科目(社会、人格教育、保健、体育など)はピリピノ語、理系科目(算数、理科)は英語を小学校1年から教授用語として用いることが定められた。国民意識の向上のために「国語」による愛国心の育成が必要だったが、言語としてのピリピノ語は理系を中心とした科学技術の語彙に弱く、全ての科目をピリピノ語で教えるのが困難だったため、バイリンガル教育という方法をとらざるを得なかった。母語の教授用語使用は禁止され、教授用語は英語とピリピノ語のみとされた。教授用語はその後何度かの変更があったが、現在は小学校2年までは地域の言語を適宜使い、後に国語であるフィリピン語と英語での教育へ移行する形態になっている。学校教育は6歳から小学校6年間、ハイスクール4年間、大学4年間の14年間で、義務教育は小学校の6年間である。

フィリピンの学校制度

年齢	学年	
19	4	大学
18	3	
17	2	
16	1	
15	4	中・高校
14	3	
13	2	
12	1	
11	6	小学校
10	5	
9	4	
8	3	
7	2	
6	1	

フィリピンの教育の歴史年表

1947年	バイリンガル教育政策が発布され、文系科目(社会、人格教育、保健、体育など)はピリピノ語、理系科目(算数、理科)は英語を小学校1年から教授用語として用いることが定められた。国民意識の向上のために「国語」による愛国心お育成が必要だったが、言語としてのピリピノ語は理系を中心とした科学技術の語彙に弱く、全ての科目をピリピノ語で教えるのが困難だったため、バイリンガル教育という方法をとらざるを得なかった。母語の教授用語使用は禁止され、教授用語は英語とピリピノ語のみとされた。
1957年	公立小学校 小学1・2年タガログ語 英語は別の教科として教える。小学校3年から大学まで英語で授業
1959年—1974年	国語の名称をピリピノ語に変更
1971年	憲法会議でピリピノ語を新憲法で国語として規定することが否決される。
1973年	憲法で国語をフィリピノ語、公用語を英語とピリピノ語と定める
1974年	バイリンガル教育;学校での母語使用禁止
1987年	憲法により国語はフィリピノ語、公用語はフィリピノ語と英語と定められる。バイリンガル教育法により文系科目はフィリピノ語、理系科目は英語を教授用語とする。小学校1.2年で補助言語として母語の使用が認められる。
1999年—2000年	新学期からリンガフランカ言語(タガログ語・セブアノ語・イロカノ語のうちいずれか)を教授用語とした教育が一部の学校で実験的に行われることになった。リンガフランカ教育では、それまでフィリピノ語と英語に限定されていた教授用語がタガログ語・セブアノ語・イロカノ語に拡大された。これは、母語でない言語で教科を教えられる子供たちの負担を減らし、学力向上を計るための政策だが、最終的には教授用語は最終学年の6年生までにフィリピノ語と英語に移行される。

フィリピンの教授用語

フィリピンの教授用語は英語を基本とし、フィリピン語や地域の言葉、母語など、時の政権の方針により変化してきた。

フィリピンの学校における教授用語の変遷

年	英語	フィリピン語	地域の言語	母語
1901－1940	全学年全教科 教授用語	—	—	—
1940－1957	全学年全教科 教授用語	—	小学校4年まで 教授補助用語	—
1957－1974	小学校3－6年の教授 用語	小学校5年からの 教授補助用語	小学校4年まで 教授補助用語	小学校1・2年の 教授用語
1974－1999	数学、科学、英語の 教授用語	数学、科学、英 語以外の教科 教授用語	—	—
1999－	数学、科学、英語の 教授用語	数学、科学、英 語以外の教科 教授用語	タガログ語・セブ アノ語・イロカノ 語のうちいずれ かを適宜教授補 助用語とする。	—

留学生のMさんの話

フィリピンでは、大企業、テレビ、新聞などのメディア関連、エンターテインメント系の仕事に人気がある。何れの仕事も英語力があることが就職に有利だ。就職後、昇進するには高い英語力が求められる。企業の経営者は超上級の英語力が必要だ。また、上流の家庭では家庭内の家族の会話も英語が使われる。大人の間ではハリウッド映画が人気で、子供たちはアメリカのアニメを見て育つ。フィリピンでは英語を話すことはステータスであると同時に、おしゃれで楽しいことでもある。

フィリピン人の留学生のMさんにフィリピンの英語教育や人々の日常の言葉について話してもらった。Mさんが育った当時、英語の学習は5歳の幼稚園からはじめたそうだ。小学校の英語の授業は最初から全部英語だったけれど、テレビやラジオ映画など周りに英語があふれていたため、授業を理解するのはそれほど難しくなかった。

ようだ。フィリピンのハイスクールでは、学校内の会話は全て英語で、フィリピン語を使うことは禁じられている。

ハイスクールになると英語の授業以外の時間も全て英語を話すように指導された。フィリピン語を話すと罰金を取られた。当時の罰金の金額は、今の感覚で20円くらいに相当する金額だったと思う。

フィリピン人の英語は仕事でも、気軽なおしゃべりでもFormal English(文法に沿った英語)を話す。大学生が友達同士で話すときはフィリピン語と英語を混ぜて話す。セブアノ語やイロカノ語などタガログ語以外の言語を母語とする人たちは、母語の異なるフィリピン人同士の会話に、英語を使うことがある。フィリピン人同士が英語で会話をするのは特に変わったこととは思われていない。フィリピンでは公式な文書が全て英語で書かれているので、英語が読めないと日常生活で困ることがあるそうだ。

小学校を中退したり、勉強が嫌いで英語がわからない人は生活上困ることがある。政府の手続きの書類が全て英語なので、基本的な読み書きがわからないととても困る。フィリピン語の読み書きは、ほとんど全てのフィリピン人が出来るが、地域によっては自分たちの地域の言葉に誇りを持っていてフィリピン語を話すのが嫌いな人たちがいる。そういう人たちは、他の地域のフィリピン人と話すとき英語を使う。

最近は大賃金のコールセンターの仕事が人気だ。きれいな英語が話せることが直接大賃金に結びつくため、英語の重要性が以前にもまして高くなってきた。

フィリピンでは最近これまで以上に英語が重要になってきている。コールセンター^{vii}がフィリピンに出来たからだ。コールセンターの給料は非常に高い。学校の先生よりも給料が良い。しかも、大学在学中でも仕事ができるので、とても人気がある。

英語能力があると就職にも、昇進にも有利だ。会社の経営者ともなれば最高度の英語力が必須となる。

就職は大企業や銀行、メディアも人気がある。就職のとき英語が話せれば有利だ。トップマネージャーは、外国人と交渉したり、海外に出張したりしなければならないのですごく英語が上手でなければいけない。会社で昇格するためには英語の能力が必須だ。芸能人の場合、ファンは自分のひいきの俳優や歌手がきれいな英語を話せばもっと

その人を好きになる。議員も英語が上手でなければいけない。でも、選挙のときはフィリピン語で演説する。貧しい人たちはフィリピン語の演説の方が好きだからだ。貧しい人たちも英語の演説を理解できるが、フィリピン語で言ってもらった方が心に響く。

留学前、Mさんが仕事をしていた会社は日本と取引があった。日本の取引先との会議は英語が使われたが、いつも通訳がついていたそうだ。通訳がつくと会議に時間がかかり、大変だったと話していた。

仕事の会議は英語が使われていた。日本人との会議のときはいつも通訳がついていた。特に年配の人は英語が話せなかった。通訳が入ると会議に時間がかかり、通常30分くらいが2時間くらいかかった。

30代の日本人は英語でビジネスが出来た。TOEICの点よりも、専門分野での能力が実際のビジネスでは大切だ。会話が苦手な人は海外に1年位行って勉強すると効果がある。

同じ年齢(30前後)の人たちは英語を話した。英語力は十分で特に問題は感じなかった。自分のこれまでの経験では日本人の英語力が特に低いとは感じていない。ビジネスにおいても、40-50代は英語が苦手な人が多いが30代になると通訳なしで仕事ができるようだ。TOEICの点数が低いと言われるが、テスト勉強をしなければテストでは点を取れない、真の実力とテストの点とは関係ない、それよりも、専門分野での能力が重要だ。その点で自分の周りの日本人は問題ないと思う。会話に自信のない人も、外国に1年行って勉強すれば英語が話せるようになる。日本で5年勉強するよりずっと効果がある。

イングリッシュサマーキャンプで日本人の中学生と話をした経験では、日本の子供たちは初めは恥ずかしそうにしているが、慣れてくれば英語で話をする事が出来る。

日本の中学生とキャンプで英語を使って交流するイングリッシュサマーキャンプに数回参加した。子供たちは初め恥ずかしそうにしていたが、だんだん英語を話すようになった。

日本の大学では日本語で講義が行われる。アメリカ人の先生も翻訳の教科書を使って日本語で授業をする。

大学の先生は日本語で講義をする。友達の話によると、大学院の英語の科目も日本語で講義だそうだ。教科書も翻訳が有ると言っていた。私の研究室の先生は英語が話せるし、学生も論文を英語で書く。でも、プレゼンテーションは日本語です。なぜだかわからない。

フィリピンでは個人の英語のレベルに応じた利益がある。少し話せれば観光客相手の商売が出来るし、超上級の英語力があれば、その能力を発揮できる職もある。英語を話すのはおしゃれで楽しいことで、ファッションの一部でもある。人々はきれいな英語を話すことにあこがれを持っている。英語上達のためには大変良い環境だと言えよう。国家としての一体感を養うために、メディアでフィリピン語を多く使うようになり、最近の子供は以前よりも英語が上手でないという話もあるが、コールセンターの進出や、通信技術者の求人増など、英語が出来ることのメリットは増え続けている。Mさんの目からは、日本人の若い人の英語は問題ないと映っている。専門分野の知識もあって、バランスが取れていると感じているようだ。ただ、英語が話せるのに、皆あまり英語で話したがないのが不思議だと思っている。

大韓民国（以後韓国と記す）

韓国はほとんどが朝鮮民族で、公用語はソウル方言の朝鮮語を話し、文字はハングルを用いている。最近では漢字の教育を受けず、ハングルのみを学んだ世代が多くなり漢字を読むことができない国民が多くなってきている。

韓国の英語教育の歴史

1883年、通訳養成のための学校「同文学」が設立される。この学校では授業は英語で行われた。3年後、同文学は廃止され、「育英公院」が設立され、自然科学などの英語以外の学問も英語で教えられた。日本軍政下では英語が韓国人や日本人の教師によって教えられたが、外国語教育の比重は英語より日本語のほうに置かれた。第二次大戦中は英語は禁止された。日本敗戦後、韓国政府は新しい教育体制を整えようとしたが、朝鮮戦争などの影響で、本格的に体制が整ったのは1960年代に入ってからだった。

韓国の英語教育の歴史

1883年	韓国での最初の公的英語教育始まる。同文学という学校でイギリス人1人、中国人2人を教師としてスタート。英語だけで授業が行われた。
1886年	育英公院で履修科目を英語で教授。
1910年から 1945年まで	日本の統治下に置かれ、第二次大戦中は英語教育は禁止された
1981年	ソウルでオリンピック開催が決定。英語の必要性が認識される。
1984年	オリンピックでの職員やボランティアの人たちの英語力を評価するテストとして、TOEICが採用される
1997年	初等教育の第3学年から英語が必修となる。目標は「生活英語」

韓国の教育制度

韓国の学校制度は小学校は6歳入学で6年間、中学校が3年間、高校が3年間の単線型の6-3-3制を取っている。私立の学校は学校数、児童数ともに全体の1%程度で、その半数以上が首都ソウルに集中している。各分野の英才を対象にした高等学校（芸術高等学校、体育高等学校、科学高等学校、外国語高等学校）がある。（普通高等学校全体の約5パーセント）。viii

韓国の英語教育

韓国の英語教育は小学校から始まる。教育の内容はリスニング・スピーキングが中心で基礎的な日常会話の理解と表現の能力を伸ばすことを目的にしている。教科書は、国語(韓国語)などの国定教科書と違って、競争を経て選ばれた12種類の検定教科書を使っている。授業は平均週2回行われる。韓国では英語を英語で教えている。クラスの生徒の人数は15人から10人くらい。生徒と向き合う時間が十分に取れる。

韓国で英語を教えていたDさんの話によると、日本では外国人講師はALT ix（アシスタント・ティーチャー）だが、韓国ではメイン・ティーチャーで、授業を全てまかされる。レッスンプランや資料なども全て自分で用意する。授業が全て英語で進められ、授業中の発話の95%が英語だ。生徒も英語で話しかけてくるので、韓国語は本当に必要なときだけしか使わない。と日本との授業の違いを話していた。

韓国の教育制度

年齢	学年	
21	4	大学
20	3	
19	2	
18	1	
17	3	高校
16	2	
15	1	
14	3	中学
13	2	
12	1	
11	6	小学校
10	5	
9	4	
8	3	
7	2	
6	1	

留学生のYさんの話

韓国では英語の能力が大学入試、就職、昇進に大きな意味を持つ。英語が出来る人はエリートとして尊敬され、評価される。英語能力は、精神的にも物質的にも生活に大きな満足をもたらすので、みな一生懸命勉強をする。勉強のしかたはとても合理的で、どの程度の英語を何のために獲得するかを決めて、そのために時間とお金を投資している。韓国の留学生のYさんに話を聞いた。韓国では英語学習は中学からで、文法とリーディング中心の授業だったが、1997年から小学校に英語教育が導入された。さんが中学生高校生だった当時は、教師も発音などが苦手で、生徒は発音指導や、英語らしい文の抑揚などは教えてもらえなかった。

学校では、アルファベットの読み方もきちんと教わらなかったし、先生の教科書の読み方は棒読みだった。学校外で英語を使う機会もなかった。高校の頃まで、Yさんは英語はあまり得意でなかった。

1997年に小学校でコミュニケーション中心の英語教育が始まると、それまでも高かった英語熱がますます加熱し、子供の教育にお金をかける親が増えた。主に、現在英語力を武器に高給を得ている富裕層が子供にも英語力を付けようと2-3歳から教育を始めている。

現在の韓国では過去の文法中心の授業を反省してコミュニケーション重視の英語による授業をしている。韓国ではお金のある人は、子供が3-4歳(韓国は数え歳なので日本でいうと2-3歳)から英語の学習を始めさせる。英語を教える幼稚園はとても人気がある。月謝がとても高く月10万-15万円くらいもする。子供に英語を習得させるために子供を留学させるのも流行っている。

韓国の高校は進学率が99%を超えている。普通高校の他に特別な才能を伸ばす高校があり、そこを卒業すると、海外留学や一流大学入学などに有利なため入試は大変難しい。普通高校は教育レベルや教員の質に差がある。ソウル地区は質が高く、塾もたくさんあるので大学入試には有利だ。

ソウルにはたくさん塾がある。ソウルの近くの江南(カンナン)は有名な塾があって、教育熱のために地価が上がった。ソウル地区に比べ地方の学校の先生は質が落ちる。塾もなくて受験にも不利だ。

大学入試が変わり、英語による長文の作文や、聞き取り問題が出題されるようになった。

1994年から1997年にかけて大学入試が変わった。それまでは大学の英語の試験は英文の翻訳問題や文法、長文読解が多かったが、改革によりテーマについて自分の意見を書くような形に変わった。2003年からは聞き取りの試験も始まった。

とはいえ、まだ学生の英語能力はそれほど高いとは言えない。大学の授業は英語で行われるが、生徒はついて行くのに苦労している。

韓国の大学の授業は英語で行われる。でも、学生はあまり英語が上手でないので、ある授業では80人の学生のうち授業の内容を理解できたのは5人だけだったことがあった。先生はしかたがないので韓国語で説明した。

韓国の大学の先生はアメリカで学位を取った人が多い。大学の講師採用時に英語力が問われ、授業を英語でするように求められる。

韓国の大学の先生は85パーセントくらいがアメリカで学位を取った人だ。最近では、教授や講師は大学に採用される時に英語で授業をするように求められる。

韓国の会社には学閥があり、有名な企業に入社するには一流の大学を卒業していることが条件となる。その上、海外留学経験があることが常識とされていて、入社を希望するときに記入する用紙に海外留学経験を書く欄があらかじめ用意されているほどだ。入社時に英語の資格試験での高得点が要求され、入社後も英語力を維持するために皆、早朝や退社後に英語学校に通う。

韓国の企業には学閥があって、有名な企業に入社するには特定の一流大学を卒業していなければならない。たとえば、SKテレコムはソウル大学出身の人が多い。他に延世大学校（Yonsei University）、高麗大学（Korea University）などの出身者も多い。入社時や入社後にTEPSやTOEICなどで高得点を要求されるので、入社試験前も入社後も英語学校に通って勉強する。

韓国企業はアメリカに留学した者を厚遇する。社会も、アメリカ留学経験者に敬意を払う。英語の出来る人と出来ない人とははっきり区別され、給料で2倍3倍の差をつけられる。

韓国では就職に有利なのはアメリカの大学への留学だ。文科系の人にはアメリカの大学を卒業して帰国し、韓国の企業で働く。理科系の学生は、卒業後アメリカの企業に就職するか、韓国の大学の教授になる。留学をすると韓国では皆から尊敬される。2年ほどアメリカで勉強した後帰国すると昇進する。MBAを取って帰国するとさらに優遇される。留学して帰国した英語の上手な人は、同じ仕事をしていても給料は以前の3倍もらえる。

韓国人のTOEFLの成績が良いのは、優秀な塾の御陰だ。韓国ではTOEFLの点が進路を決める大きな資格となっているため、みんな必死になって勉強する。だが、テストで高得点をとっても英語が話せるわけではない。Yさんは、自分の研究室の日本人学生は皆英語が上手だと話していた。

韓国のTOEFLテストの成績が良いのは塾でテストの勉強をするからだ。韓国野宿は出題傾向を徹底的に研究しているから、3ヶ月みっちり勉強すれば誰でも230点くらい取れる。テストで点が取れても英語が話せる訳ではない。何の役にも立たない。

韓国では有力企業が、英語が堪能で優秀な人材を破格の待遇で集めている。英語が堪能だと、社会的にも尊敬され、一目置かれることになるため、皆熱心に英語能力の向上に努める。しかし、最近は塾での学習熱や、子供の留学ブームなど、あまり健全でない英語学習が問題となっている。企業はTOEFLテストの点を社員の入社や昇進の足切りに使っており、英語を苦手とする人は他の能力があってもチャンスさえ与えられないことになる。Yさんは日本人の英語能力は特に問題がなく、むしろ、韓国の、テスト目的の英語学習の弊害を心配している。英語の学習はヒアリングも発音も、目的を持って取り組めば身につけられる。英語力を身につけた後、その能力で何を話すかがより重要な問題だと語っていた。

日本人の「英語との距離」

日本人が英語が苦手だといわれ始めて久しい。学校の教え方がいけない。受験英語が役に立たない。英語の発音が日本人には難しい。文法が日本語と全然違う。理由は様々あげられているが、一向に対策がとられないまま、現在に至っている。

学校英語教育の悪循環

一般に日本人は英語を学習する際に、何のために学習するのか、どのような質と程度の英語能力を目指すべきか、目標を具体的に考えない。ほとんどの学生は学生時代、一日のほとんどを学校内で過ごし、生の英語に触れる機会がないまま卒業する。そのような学習をして大学を卒業し、教員となった者は、また学校という狭い世界のなかでルーティンで授業を行い、通じない英語_xを生徒に教える。入学試験、就職試験では英語の問題が出題される。それらの試験では「聞き話す」力は問われないので、英語の学習の際、聞いたり話したりする練習が軽視されることになる。試験のための英語学習を重視して、生きた英語に触れる努力をせず、使えない英語を学習する悪循環を生んでいる。日本の英語教育は基本的に和文英訳、英文和訳が中心で、試験では文法通り正確に訳せるかどうか問われる。どうしても日本的発想に基づいた翻訳をしがちだ。そこでは、内容が理解できているかではなく日本語に変換できるかが試されている。

英語と日本語との言語的な距離と習得にかかる時間

アメリカ国務省の外務研究所の(Foreign Service Institute)は、外交官養成所として、アメリカ人外交官に世界中のいろいろな言葉を集中的に教えている。この研究所が1973年に英語を母国語とするアメリカ人が、どの言語をどのくらいの期間(時間)学習すると、どの程度の

レベルの会話能力に到達するかを研究し、その結果を公表した。対象となる諸言語は、英語を母国語とする人たちにとって最も習得しやすい言語から、最も習得が難しい言語まで、4つのグループに分かれている。このグ

学習の難易度によるグループ分け

グループ	言語
1	オランダ語、フランス語、ドイツ語、ポルトガル語、スワヒリ語など
2	ギリシャ語、インドネシア語、マレイ語など
3	ビルマ語、フィンランド語、ハンガリー語、タイ語など
4	日本語、韓国語、中国語、アラビア語

グループ分けによると、英語を母国語とする人たちにとって、日本語や韓国語は最も習得が難しい言語となっている。アメリカ人が、グループIのオランダ語を言語能力ゼロの状態から「一般的な言語学習の完成レベル」であるLevel 3^xにほぼ960時間で到達するのに対して、日本語や韓国語の場合、2,400—2,760時間かかる。ちなみに、『英語が話せる日本人』で望まれる平均的な英語能力は高校卒業時に英検2級、大学卒業時に英検1級程度とされているが、これはそれぞれLevel 1+とLevel 3に相当する。ゼロからLevel 1+までに必要な学習時間は平均的な学習者で720時間、Level 1+からLevel 2になるのに600時間、Level 2からLevel 3になるのに1080から1440時間かかる。級が上がるに従いレベルを上げるのに時間がかかるようになる。しかも、この研究で学習者は、通常の学習の1.3倍効率が良いと言われている、週30時間の集中訓練を受けているのだ。学習指導要領によると、英語は中学、高校6年間で875時間学習することになっている。大学では学部により学習時間が違うが、目標レベルに達するには学習時間が圧倒的に足りないことは確かだ。(英語学習の構造)

生きた英語習得に熱心になれない理由

日本の企業は人事制度の制約から、社員の能力の評価を賃金に反映できない。また、年齢が若ければ仕事上の権限も与えられず、能力を生かす場も与えられない。そのため、自分の能力に自信のある者は、相応の賃金を得るために高い評価を与える企業に移籍することになる。日本の企業は1980年代の高度成長期に自社生え抜きの社員を大量にアメリカなどに留学させた。しかし、MBAなどの資格を取って帰国した社員は資格や勉強の成果を生かせる仕事を与えられず、失望して会社を後にした。企業を後にする自信のない人や、転職をよしとしない人も、企業内で自分の能力を隠して仕事をしている。高い英語能力を求める一方で、英語力の有る有能な人材を差別し、冷遇しているのが日本企業の現状だ。

ある大学教授はハーバード大学を卒業して日本に帰ったが、英語屋として扱われて、他の実力を認めてもらうのに10年かかったと語った。「そういう人が日本に帰ると、なかなか日本人として、まともに扱って貰えない。外国人ではないが変な日本人であり、いわば『外国人』だ。」(ウィークリー 黄トンボ^{xii}) 海外に進出している日本企業を研究した論文でも、外国語が堪能な社員の処遇について以下のように報告している。

ボーダーレスエコノミーとかグローバル経営の時代とされる今日でも、国際志向というよりも、むしろ国内優先の組織文化の企業は多い。国内優先の組織文化の企業では、海外勤務の経験はあまり評価されず、国

内で実績をあげた人が出世するという暗黙のルールができています。海外勤務経験者で英語のよくできるひとは、ときに「英語屋」といわれ、社内の主流に入れたい。そのため、英語ができて、社内ではなるべく英語を話さないようにする人が多い。(ESPと経済英語・ビジネス英語^{xiii})

英語の出来る人は英語屋とばかりにされていました。英語を使う日本人は自己主張が強い、はっきり物を言う、単純化しすぎる、鼻持ちならないなどと言われていました。(総合商社—日本人が日本語で経営—^{xiv})

帰国子女がもてはやされ出した1980年当時も、海外転勤をする家族は、娘はさておき、息子は日本の大学を受験させるため、高校3年になると単身帰国させた。近頃は塾の海外進出などにより、日本帰国準備が行き届くようになり、帰国生が以前のような帰国生らしさを失い、普通の子になってきている。

岡田：画一的というか、同化というのか。かつては授業で積極的に質問したり、先生に反論したりしたのが、最近はおとなしい。むしろ無気力な感じすらする。

渡辺：四、五年前までは、帰国子女が日本の教育を変える起爆剤になるんじゃないか、と考えていた。実際少しずつ変わってきた面もある。でも、日本の社会があまりに強固なのに加えて、海外へ行く親や子供が、日本の社会に合わせるようになってきたのをみると、もう起爆剤にはなりえないのかな、と思い始めている。

帰国子女「らしさ」どこへ 渡辺紀子さんと岡田真樹子さん(対論)
1997.02.08 読売新聞

海外留学をするのは女子が6割で男子よりも圧倒的に多い。企業で出世する可能性のある男子は余計なリスクを取らない。日本の企業は語学力があり、国際感覚のある有能な人材を求め、良い人がいないと嘆いているが、実はそういう人材に黒子のような役割を押し付けていないだろうか。日本企業は社内の人材を活用できないばかりか近頃は世界規模の賃金競争に負けて会社にとって貴重な人材を外国の企業に引き抜かれている。

米フォード、トヨタの米販売副社長を引き抜き(ロイター)
[デトロイト 11日 ロイター] 米自動車大手フォード・モー

ターは11日、トヨタ自動車の米国トヨタ販売のジム・ファーリー副社長をマーケティング・コミュニケーション部門の責任者に指名した。11月中旬に就任する。米国での販売減に歯止めをかける狙い。

ファーリー氏は、ほぼ20年間にわたってトヨタ自動車に勤務してきた。ファーリー氏は現在、トヨタの高級ブランド「レクサス」部門の幹部を務めている。また、米国での若者向けのブランド「サイオン」立ち上げの功労者でもある。

トヨタは最近、クライスラーに北米トヨタの社長だったジム・プレス氏と「レクサス」部門の幹部だったデボラ・メイヤー氏を引き抜かれている。トヨタの幹部が米自動車大手に奪われるのはファーリー氏で3人目となる。

[ロイター：2007年10月12日 09時47分]

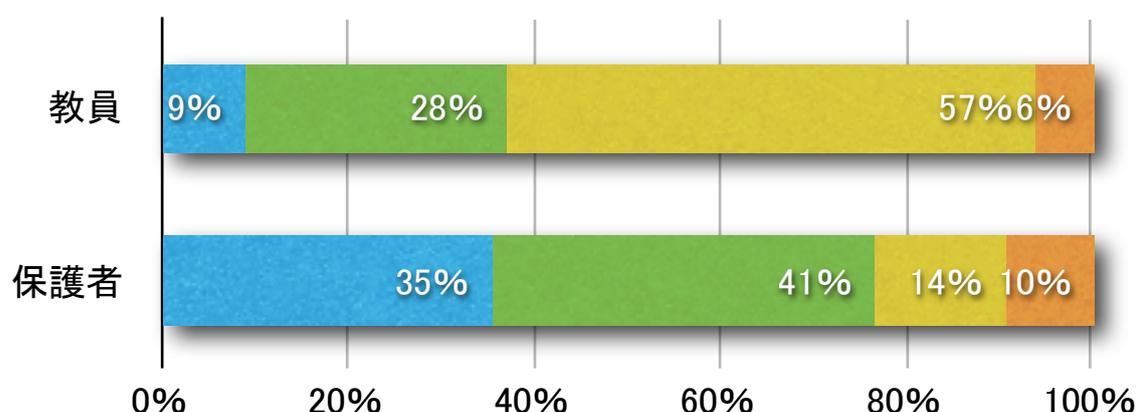
韓国では3年前まではソニーがサムスンよりも賃金が高く人気があったが、近年、対ウォン為替が円安に振れ、年収ベースでサムスンが高額になり、ソニーを去る人が増えているという。外国語に興味を持ち、生き生きとした外国語を学ぼうという意欲にあふれた人が多い国では、外国語が堪能な人々ものびのびと生活できそうだ。残念ながら日本はその逆で、試験のための英語こそ珍重されるが、生き生きした外国語は敬遠され、外国語が堪能な人材は沈黙する。

早期英語教育に分かれる意見

アンケートによると、小学校英語教育は親には歓迎されているが、英語教育の専門家や小学校の教員を中心に反対する声も有る。ベネッセコーポレーションは2006年7月ー10月、全国31の公立小の保護者計約4700人と、公立小約3500校の教員を対象にアンケート調査を実施した。それによると、保護者で必修化に「賛成」としたのは35.2%、「どちらかと言えば賛成」は41.2%。「反対」と「どちらかと言えば反対」は、合わせて14%、賛成が反対を大きく上回る形になった。これに対し、必修化に「賛成」とした教員は8.7%、「どちらかと言えば賛成」も28.1%にとどまった。一方、「反対」、「どちらかと言えば反対」は計56.9%に上った。教員の反対の理由は英語を教える自信がないことが大きく影響しているものと思われる。教員自身の子供の英語教育にも反対なのかどうか興味のあるところだ。

■ 賛成 ■ どちらかと言えば賛成 ■ 反対／どちらかと言えば反対
■ その他

小学校英語教育賛否のアンケート



同じ漢字圏の国でも英語学習の負担感には違いがある

英語は、日本人、韓国人、中国人、アラビア語圏の人にとって学ぶのが難しい言語であるということが先のアメリカ国務省の研究から推察されるが、子供たちにとって母語の学習をしながら同時に英語を学ぶ際の負担については国によって違いがあるのだろうか。漢字圏の国について、小学生が学ぶ文字について見てみる。

韓国はハングルと漢字を学習する。小学校のうちにはハングル文字だけを学習し、中学から高校1年まで漢字の勉強をする。韓国語では、漢字の意味と読みは原則として一つだけだ。中国の小学生は漢字と漢字の発音を表すアルファベット表記のピンインを勉強する。漢字の意味と読みは原則として一つ。漢字とピンインは高校まで学習する。日本は小学校でひらがなとカタカナと漢字とアルファベットを学習する。日本の漢字は音読みと訓読みがある。音読みは複数ある(行;ギョウ、コウ、アン)。訓読みも複数ある(行;い・く、ゆ・く、おこな・う)。送り仮名が品詞によって違う。(話=名詞、話し=動詞)また、一つの読み方で違う漢字(同音異義語)が多数有る「かてい」→仮定・家庭・過程・課程。読み方と意味が違う漢字(市場→しじょう、いちば)。漢字とひらがなの組み合わせも場合によって使い分ける(こども、子ども、子供、コドモなど)。発音が同じで意味もひらがなの表記も違う物がある。例;発音はoojiで、意味によって「おうじ:王子」、「おおじ:大路」。ひらがなは濁音、拗音、促音、長音がある。長音の表記のしかたは言葉によって違う。例;「oneesan おねえさん(お姉さん)」、「eega えいが(映画)」。カタカナの場合はひらがなの拗音ゃゅょのほかに、アイウエオがある。リフォーム、ディスカウント、フィットネスなどカタカナ語がどんどん増えている。ローマ字はヘボン式ローマ字を習う。ローマ字には他にいくつかの表記方法があり、標準となる正書法は無い。このように、日本の小学生は1年生から膨大な量の文字を覚えなければならず、漢字の学習は高校まで続く。日本の子供たちの国語の学習の負担は他の漢字圏の子供たちよりもかなり重いと見える。

賛成意見と反対意見

早期英語教育には賛成や反対の立場から様々な意見が出ている。書籍も多数出版され、テレビの討論会でも激論を戦わせている。文部省の審議会でも専門家から様々な立場からの意見を聞き、小学校英語教育の実施の参考にしている。

早期教育賛成の立場から 中嶋 嶺雄、唐須教光、渡邊時夫の各氏の意見

中嶋 嶺雄(なかじま みねお)国際教養大学学長;コミュニケーションの手段としての英語が重要だ。小学生のうちに異文化にふれ、英語を習得後には他の言語も学ぶべきだ。

国際的なコミュニケーションの手段としては英語が圧倒的な意味を持つ。柔軟な適応力を持つ小学生から英語に親しみ、異文化に触れる教育が大切だ。できれば中国語なども覚えて各自の世界を広げ、世界

中どこにでもアクセスできる教育が必要だ。(NHK「新BSディベート」)

唐須教光(慶応義塾大学文学部教授)；コミュニケーションを行うときは余裕を持って出来るのでなければならない。そのためには早期の教育が必要だ。

英語で行われる会話を容易に識別できなければコミュニケーションに支障をきたすのは目に見えている。緊張しながら一所懸命にやればできるというのでは困るのである。容易にコミュニケーションを図れるようになるには早期の英語教育しかない。(日本の論点 2005年版)

渡邊時夫 清泉女学院大学教授；これからの世界では、一部のエリートが英語を使えるだけではだめで、国民全体が一定のレベルの英語を操れるようにならなければならない。これまでの英語教育の失敗の原因の一つは教育開始年齢が遅すぎたことにある。小学生に合った内容を、適切な方法で教えれば教育の効果がある。

「英語の使える者は国民の5～10パーセントで良い」という時代は過去となり、個々の日本人が一定のレベルの英語使用能力を習得できるように」することが必要になってきた。中学1年生の場合、知的レベルはかなり高い。しかし、英語の知識は零である。このため、小学校1～2年生でも簡単に学べる学習項目から始めなければならない。“What's your name?”とか、“How are you?”などという簡単なことから教えることになるが、中学生の知的レベルには合わないし、これらは、繰り返しやゲームを好む小学生に向いている。また、listeningは英語をマスターするための基礎基本である。日本人はこれが弱い、小学校で週1時間勉強すれば6年生にはずいぶん聞けるようになるものだ。(教育課程部会 外国語専門部会(第12回) 議事録・配付資料)

早期英語教育反対の立場からは、鳥飼 玖美子、寺島隆吉、藤原正彦の各氏の意見

鳥飼 玖美子(立教大学教授)；小学校の教諭は英語を教える資格を持っていない。そのような教諭が子供に英語を教えると間違ったことを教えてしまう危険がある。子供が小さい頃から英語を習っても、苦勞せずに語学を身につけられるわけではない。

「学校英語は何も役に立たなかった。我が子は苦勞せず話せるように」という親心から、小学校での英語教育を支持しています。しか

し、「苦勞せずに」というのは外国語学習では、ありえません。週1回の小学校英語で<らくらく英会話>を期待するのは、無理があります。小学校の担任は、英語の専門家ではありません。ALT(英語指導助手)は英語を母語として話しますが、英語教授法を専攻したわけでもなく、教育に関しては素人です。全国の公立小学校2万3千校、高学年だけで8万学級分の教員を、どのようにして養成するのかは、大きな課題です。英語教育で最も肝心なのは導入期です。小学校で素人が担当した場合、誤った英語を刷り込む危険性があります。(NHK「新BSディベート」)

寺島隆吉；帰国子女で、英語をネイティブ並に話す子が帰国後、英語力保持のための塾に通っても、すぐに忘れてしまう。小学生が少し英語を勉強するだけでは十分な成果が期待できない。

ネイティブ並の英語力を持つ小学生が、週2時間それを忘れないために英会話を塾でやってもほとんど忘れてしまうというのに、英語ゼロの小学生が週2時間英会話主体の英語を習って何か残る物があるのか。(小学校での英語教育は必要ない！ 大津由起雄(編)2005年5月)

藤原正彦 日本の言語や文化について学ぶことの方が先決だ。

経済界の提言を取り入れて、英語、パソコン、株式取引、企業家精神などを小学生に教えていたら、週20数時間という窮屈の中、国語や数学の基礎力がガタガタとなる。(中略)特に国語はすべての知的活動の根幹である。国語は、思考の結果を表現する手段であるばかりか、国語を用いて思考するという側面もあるから、ほとんど思考そのものと言ってよい。これが十分な語彙と共に築かれていないと、深い思考が不可能となる。また国語を通して様々な文学作品に親しみ、そこから正義感、勇気、家族愛、郷土愛、愛国心、他人の不幸に対する敏感さ、美への感動、卑怯を憎む心、もののははれ、などの最重要の情緒を身につける。日本の文化、伝統を知りアイデンティティーを確立する際にも国語は中心となる。これら人間の中核となるものは、小中学生のうちに全力で基礎を画めておかないと手遅れになる。日本の論点 2002 (文芸春秋社 2001.11.10)

賛成意見は『英語が使える日本人』に述べられているように国際化の中、異文化に親しみ英語を使ってコミュニケーションを図れるようになることが必要だという立場からの意見だ。それに対して、反対意見には、期待するほどの効果はない、今の教員の状況では間違っただけを教えて子供に苦勞させるかもしれない、という消極的反対、条件付き反対の意見と、日本の言語や文化について学ぶことが先で、学校教育の時間数が減らされる中、新たに教科を増やすのは絶対反対という強硬派まで様々だ。

実験校での小学校英語教育

現段階では小学校英語教育の教育・指導内容は具体的に決まっていないが、学級担任とALTや英語が堪能な地域人材が協力してティーム・ティーチングをする形を、文部省は考えているもようだ。今後小学校の英語教員の英語指導力がどの程度向上するか、教材教具の整備や活用がどのように行われるかを見ながら決めて行くことになりそうだ。

英語の授業風景

先行する全国の私立学校、研究校では既に英語教育が開始されている。新聞に各地の小学校の授業風景が紹介されている。子供たちと先生のやり取りが紹介されているが、その中に文法的な誤りや、日本語を英語に直訳したフレーズが見られる。

「京都 立命館小学校」(私立)

去年の春、京都に開校した立命館小学校では小学校1年からネイティブの先生について英語を学ぶ。

<先生>

「グッドモーニング、エブリワン！」

<生徒>

「グッドモーニング、シャヒードティーチャー！」

英語教育も柱の一つです。

最近では取り入れる小学校も増えてきましたが、こちらでは1年生からネイティブの教師の下、英語のみを使って授業が進みます。(毎日放送2007年7月6日放送^{xv})

「山形県舟形町立の小学校」(公立)

「Stand up, please (起立)」と児童に呼びかけて、授業が始まった。

動物が描かれた絵を子どもたちに見せながら、「What is this? (これは何ですか)」と尋ねると、「pig (ブタ)」と元気な声が返ってきた。2年生の「英語活動」の授業の1コマだ。(読売新聞2006年12月19日)

「グッドモーニング、シャヒードティーチャー！」は「シャヒード先生お早うございます」の英訳。「Stand up, please」は「起立」の英訳。英語圏の国では先生を普通Mr.Mrs.Miss.Ms.を付けて名前と呼ぶのが普通だ。授業を始める前に「起立、礼、着席」と言うのも日本の学校の習慣だ。言い方もstand up は命令形でplease を付け加え

でもかなりきつい。先生の "What is this?" という質問には一匹だったら "a Pig!" 複数だったら "Pigs" と答える。新聞やテレビは子供たちが元気に英語を学んでいることを伝えたかったのだろうが、凶らずも鳥飼 玖美子氏の指摘した通り、「間違った英語を教える」実態が報道されてしまった。ちなみに、文部科学省のホームページでは、小学校で生徒が学習するフレーズとして、"Do you know this?" "I like an apple." "What letter is this?" のような例文を提示している。口語体だったら、状況によっては言わないこともないのかもしれないが、普通は以下のように言う。

Do you know what this is? これは何か知ってる?

Do you know who this is? これ、誰か分かる?

I like apples. 私はリンゴが好きです。

What size is this? これ、サイズはいくつですか。

(一見ただけではわからないことについて質問する。What letter is this? は先生が生徒に文字の読み方を質問するときを使うことはあっても、生徒が発話することはない。使えば大変無礼な発言となる。)

英語教員の養成は小学校英語教育の最大の課題だ。

Tさんの話

Tさんは、都内の小学校教諭に「英語の教え方」の助言をする仕事をしている。研究校に指定された小学校では、年間数時間から多いところでは35時間の英語の授業が行われているが、Tさんの担当している小学校では、1年生から6年生まで、担任の教諭が中心となり、ALTと助言者のTさんの協力の下、週1回授業をしている。クラスの子供たちの興味や進度に合わせて教案を微調整しながら授業の進行をリードするのがTさんの役割だ。最終目標は卒業式の日、全員が英語で自己紹介をすること。自分の名前、好きな科目、出来ること、誕生日などを、簡単な文にして話せるように練習を積み重ねて行く。小学校には月1-2回ALTが来る。ALTは20歳前後の若者が多く、1-2日研修を受けて、学校に教えに来る。しっかりと教えることが出来て授業を任せられる人もいるし、英語の教え方を一から教えなければならない人もいる。学期の途中で国に帰ってしまう無責任な人もいる。何もわからないALTの若者に一通り英語の教え方を教えるのもTさんの仕事になっている。

Tさんが、小学校教諭たちへの助言を始めるようになって気がついたことは、小学校の先生と生徒の親子のような強い絆だ。

クラスによって雰囲気は全く違う。クラス担任の英語学習への取り組みが、生徒たちの学習意欲に直接影響を与えている。小学校の先生は生徒を引きつけるコツがわかっているし、教え方のポイントがわかっているのだから、英語も適切な助言があれば楽しく授業をすることが出来るようになる。子供たちも教えられたことをどんどん吸収する。

日本の学校のスケジュールは「単元」単位で立てられている。一つの項目は一つの孤立した「単元」として認識され、学習項目相互のダイナミックな関係は無視される。

小学校の勉強は単元ごとに教える「単元」消化型学習の形式を取っている。単元とは、教える内容のひとまとまりのことで、例えば国語だったら「ごんぎつね」の漢字の練習や文の読解などの一連の学習をさす。教師はそれぞれの単元をどのくらいの時間で教えるかを把握していて、一つの単元が終われば次の単元に移る。単元を時間通りに終わらせることに熱心で、終わりさえすればそれで安心してしまいう傾向がある。しかし、英語の学習は積み重ねが必要なので、このような「単元消化」という学習のしかたはなじまない。最初の学習事項が身に付かないうちに次のことを教えると、混乱して結局何も身に付かない。1年終わってもHallowしか覚えていないという結果になってしまう。学校の先生には、基本の学習から少しずつ難易度を上げてゆく、スパイラル方式で学習を進めるように助言をしたいのだが、それがとても難しい。教師はプライドが高く、また、英語の授業に不安を持っているため、不用意なことを言うと傷ついてしまう。

教師が英語の授業に不安を持つ原因の一つに研究授業がある。

研究授業では、例えば、3回の授業で、1回目に動物の名前を教える、2回目に質問のし方と答え方のフレーズを教える。3回目にお互いにワークシートを持って質問し合う、というふうに進められる。授業を見学した教師は、自分のクラスでその通り授業をするが、研究授業のようにうまくいかず、自信を失ってしまう。しかし、研究授業では通常、授業以外に徹底的にスキットのトレーニングをする。3回で全員が新しい項目を覚えられるわけでは無いのだ。スキットの練習を朝礼

や昼休み時間に徹底的に実施している事実を知らされない教師たちは、自分の授業の失敗の本当の原因を知る由もなく、自信を失ってしまう。

日本の学校には内と外の顔がある。外に対して「我が校のあるべき姿」を維持するための行動はごく普通のことらしい。学校で研究授業が行われると、教案や様々な資料など、研究の成果を冊子にして学区内の関係者に配る。また、各学校内では、手作り教材やイラスト、練習問題などが共有されている。しかし、学校のホームページはあってもそういった資料は見当たらない。蓄積された研究の成果は公表されず、共有化が進まない。

研究校は視察のある日は玄関がきれいに掃き清められる。先生たちは着慣れないスーツを着ている。普段の状態を見ないと研究実践の本当の成果はわからないのだが、至らない点を見られるのは学校の恥という意識があるのか、よそ行きの顔になってしまう。

小学校の「コミュニケーション」はインタビュー・ゲームをすること。子供たちは、わからないことがあっても質問をしない。

小学校の英語教育ではコミュニケーションを重視するとされているが、何をコミュニケーションとしているのかがはっきりしない。最終的に何をするかと言えば、ワークシートを持ってインタビュー・ゲームをする。低学年のうちには子供たちは無邪気なので授業に乗ってくるが、高学年になると教師の目の届かないところでサボるようになる。

必要な教材や教科書がまだそろっていないので教えにくい面がある。英語の知識のある者が行政に、何が必要かを提言して行く必要がある。

あるALTと話していたら、他の学校の授業の話題になった。

日本人の先生が生徒にハサミを見せて

Q:What's this?

A:This is scissors .

と教えていたそう。

Q:What are these?

A:They are a pair of scissors.

でなければいけないのに、気持ち悪い・・・と嘆いていた。

手元に猫の絵カードがあって、catという名詞を教えても、それをそのまま会話には使えない。

Do you like cats?でcatは複数形にしなければいけない。

what is this? の返事は

This is a cat. で冠詞を付けなくてはならない。猫の絵も、複数形と単数のものが必要だ。担任でも教えられると言っているが、知識の有る人が付いていないと、とんでもないことを教えてしまう危険がある。

小学校の英語教育を進めて行く上で一番難しいのが、行政との対話だ。行政側は「目に見える」成果を求めるが、教育はすぐには成果が出るものではないからだ。とはいえ、成果を見せなければその後のチャンスは与えられない。行政側にどのようにアピールするか考えながら、教える内容や方法を決めていかなければならない。二番目は、学校の先生たちとの対話だ。英語の授業は、小学校の他の教科の教え方とはいろいろ異なった点があるが、その点を理解してもらうのに、とても気を使う。先生との信頼関係を築きながら、少しずつ提案を重ねて効果的な授業が出来るように工夫しなければならない。そして、三番目が、各年齢の子供たちに適した教材、教具、教科書がそろっていないことだ。小学校1年から6年までの子供たちは、それぞれ発達段階が異なっていて、教え方を変えていかなければならない。小学校1年2年は幼児英語の段階で、繰り返しや、歌やダンスで教えられるが、4年、5年と学年が進むにつれて子供っぽい歌やダンスやゲームにはそっぽを向くようになる。私立の小学校や英会話塾、英語個人レッスンなどで、この年代の子供の英語英語教育は実施されているが、様々な面で条件が違い、そのノウハウは使えない。教え方はまだ手探りの状態だ。

日本の教育のもう一つの側面

何のために英語を学ぶのか

フィリピンでは、陽気な国民性からハリウッド映画が大人気で、映画を見るのが英語学習の一つの動機になっている。多民族社会なので英語は民族間の共通語としても使われる。また、英語でのおしゃべりは、おしゃれで楽しいことだと認識されていて、同じ言語を話すフィリピン人同士でも気が向けば英語で話す。そして、1997年のアジア通貨危機以後は英語力は海外に働きに出る人々にとってますます重要な能力となってきている。韓国では日本を追い越す勢いで急激な工業化が進んでいる。経済は拡大しており、英語能力のある有能な人材に企業は惜しみなく投資し、そのような企業の姿勢が子供を持つ親や学生の英語学習への強い動機になっている。また、海外留学をした者は国で尊敬され、その努力が讃えられ、評価される風土がある。翻って日本の英語学習の動機は何だろう。習いたいことベストテンで英会話が上位にランクされ、実際に多くの人が英語学校に通っている。英語学習の書籍も多数出版され、英語産業は潤っている。日本人は英語をどのような目的で学んでいるのだろうか。英語を学ぶ目的は以下のような種類に分けられる。

A. 実用的な英語；英語そのものを学ぶ。

受験のため、入社試験のため、論文を書いたり、資格試験を受けて自己の英語力を現実の世界で活用するため。また、英語を使ってビジネスをするため。こういった実用目的では、英語そのものを学ぶことになる。文法や単語を覚え、読解力や表現力のトレーニングを行う。

B. 異文化体験；英語を通して興味のある分野について学ぶ。

学んだ英語を使って文学、音楽、経済、歴史など興味のある分野、先端科学、医療、仕事や生活に役立つ情報などを読み取ることは、英語をさらに深く学ぶ強い動機になる。英語という言葉を通して、様々な情報に触れ、理解することにより新しい文化を体験することができる。

C. 自己実現；英語を通じて得た知識が人の精神的な成長を促す。

英語の書籍やメディアの情報量は日本語のそれよりも遥かに多い。また、英語が世界の様々な国々で話されている現在、英語を解することによる行動半径の拡大、交友関係の拡大、視野の拡大により、物事を深く考えるようになる。

D. 趣味；たしなみとして身につける。

英語は西洋文化の香りのする上品なお稽古ごととして人気だ。外国人に会話を習ったり、グループでアメリカやイギリスの文学作品を読んだりして英語に触れる時間をもてば、充実した気分になれるし、友達に自慢も出来る。スキルの向上を目的としているわけではない。

B.異文化体験、C.自己実現としての英語学習は、自分で学ぶものなので、学校では、A.実用的な英語を学ぶことになる。実用的な英語の中でも、实用会話を学ぶのは、「一人でも海外旅行へ行けるようになりたい」、「家族の海外転勤に付いて行く」、「客との会話でサービスの内容を決める必要がある（タクシー運転手 クリーニング業 寿司屋などの飲食業）」と言った理由が多い。では、現役のホワイトカラーの人たちは英語学習にどのように取り組んでいるのだろうか。TOEICテストを運営する財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会が2007年7月10日から12日まで、全国の20代から30代の男女400人を対象にインターネットを通じて調査を実施した。それによると、仕事を持つビジネスマンやOLは、話したり書いたりする英語能力を重要と考えながら80%近くは能力を養うための対策を何もしていない、という結果がでた。（日経新聞2007年7月23日）若い世代の英語に対する消極的な姿勢が浮き彫りになる形となった。

〈街の人〉

Q. 英語はお得意ですか？

「苦手です。だからすごい困っちゃいます」

「私が全然しゃべれないもので、子どもに習わせてるんですけど…」

〈子ども〉

Q. しゃべれるようになりたい？

「うん、思う。いろんな他の国とか行ってみたいから」

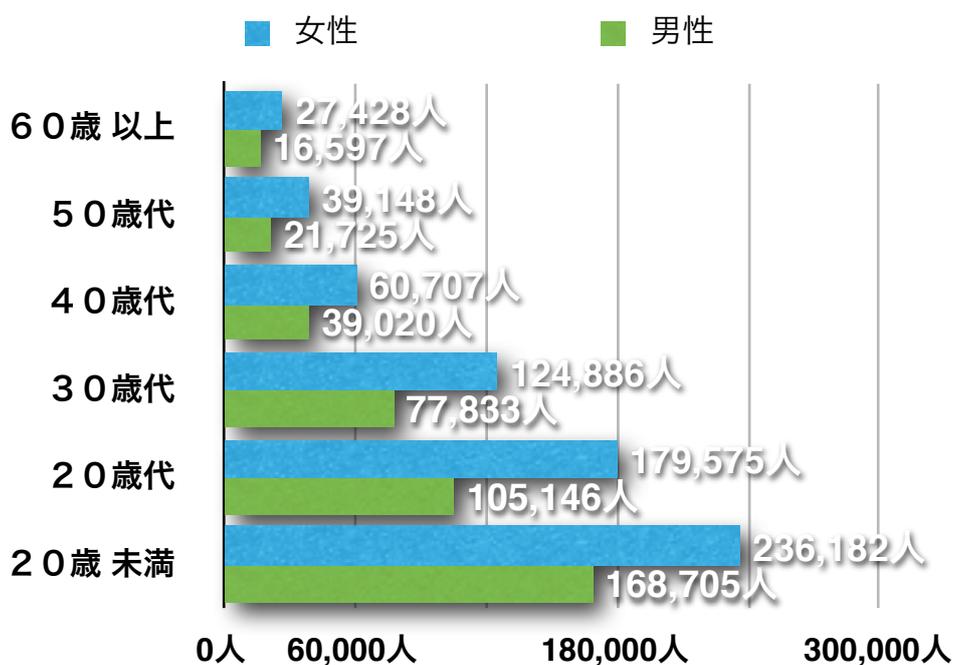
Q. どこに行きたい？

「んー、イタリアとか！」 VOICE 「小学生の英語必修化に賛否の声」 xvi

これと言った目的もなく習う英語は「D.趣味としての英語学習」だと言える。この〈街の人〉は「すごい困っちゃいます」と言っているが、実際には英語が話せなくても困ってはいない。子供にはとくに目的もなく英語を習わせている。日本の英会話教室はおおむねこのような生徒をターゲットに営業をしている。

外国語会話の2005年の総受講者は100万人。2002年の調査と比較すると60歳以上の受講者が30.7%と大きく増加した。20歳未満20歳代はあまり変化はなかった。どの

年代でも女性の受講者が多く総受講者数でも男性と女性の受講者の比率は4:6となっている。（平成17年特定サービス産業実態調査）



男性受講者	429026人	外国人講師	15247人
女性受講者	667926人	年間売上高	1928億円
受講者合計	1096952人		

（2005年11月1日現在外国語会話教室受講者^{xvii}）

仕事を持つ20代30代の若者は英語能力は重要だと思いながらも英語能力を養う対策を何もしておらず、60歳以上の定年後世代の英会話学習者増加率が高いことは、楽しみとしての語学学習者が増えていることを物語っている。英会話学校は手軽さと費用の安さを売り物に生徒を増やしているが、安い給料で雇われた外国人英語講師は『解雇されないように、生徒の機嫌をとることばかり考えている。ホストクラブのホストになった気分だ。生徒の英語力を上げよう、とは思わない』（2005.06.07 読売新聞）と本音を語っている。『英語の使える日本人』では、国民全てが一定の英語力を持つことを目標としているが、厳しい学習に耐えて英語のスキルを磨こうとする人は少ない。

伝統芸能の教育と日本の教育

外国からは日本人の英語能力の不足を批判する声がある。ボストンカレッジ、PKアルトバック教授は日本の大学生の英語力の無さを「大学院でも常に英語の講演に

通訳が必要だと」批判し、日本の大学の体質についても「日本は魅力的な国だが、社会の閉鎖生が大学の国際化の大きな障害になる。」と語った。しかし、日本の社会の何が外国から見て閉鎖的と映るのだろうか。日本人にとっては、なかなか自覚しにくい。

魅力的だが閉鎖的なものの代表的なものに、伝統芸能や国技が挙げられる。日本は江戸時代から多様で豊かな文字文化を持ち、職人や商人の徒弟、芸能の内弟子稽古、手習いや学問の素読、武芸の稽古や仏道修行など様々な学習の場を形成していた。そこでの伝統的な教育観は、

- 1、実現すべき善は自らの外部にある。
- 2、その善に移る方法は身体を動員した体得による
- 3、身体的な近くを通して人の内部（心）が形成される
- 4、教師は教える主体であるよりも、子供がまねるモデルである。

というものだった。明治時代の初頭、短期間での効率的な近代化達成の必要に迫られ、日本的な「伝統文化としての教育」は西洋の「文明としての教育」により学校教育から排除された。しかし、伝統芸能の教育制度の中には今も「伝統文化としての教育」が残っている。

日本の伝統芸能には様々な流派がある。各芸道の家元は、おのおのの流派の最高権威伝承者として免状や資格の発行、その流派の芸を広める教師の養成などを行っている。教育は、師匠の一挙手一投足をまねることにより芸を自らの体に教え込む方法で行われている。「模倣と習熟による身体知を追求した先に深い精神世界への入り口がある。」と言う考えは現在も伝統芸能の世界ではごく普通に教えられている。（教育の社会文化史）^{xviii}

ある箏曲社中の師範養成制度

昔から日本では、稽古は子供がまだ幼いうちに始めるのが良いとされてきた。数えで6歳（現在だと4-5歳）の6月6日に習い事や稽古を始めるのが習わしだ。伝統芸能の稽古はどのようにされるのだろうか。一つの例としてある箏曲の一派の場合を取り上げてみる。

練習 日本音楽には、西洋音楽のような練習曲はない。最初の練習から、いきなり「六段」という曲を練習する。師匠と向き合って師匠の弾く旋律を模倣をする。習い始めて数ヶ月で一通り「六段」が弾けるようになる。このようにして一つ一つ曲を覚えて行く。一つの曲が仕上がると次の曲を習うことが許可される。

免状 規定の曲を全て仕上げると「初伝」の免状を頂くことが出来る。「中伝」「奥伝」「皆伝」と免状を頂くと、その後は自分で教室持ち、弟子を取って教えることのできる資格の「助教」「教師」「師範」「大師範」へと進む。皆伝までの免状は、技術より経験年数が重視され、年数が経つとそろそろお免状を取りなさいと言われる。助教以上の免状は師匠が弟子の才能を見極めて許可する。

独り立ち 皆伝までは趣味の芸で、助教からプロとしてのトレーニングが始まる。そして免状の価格も 助教20万円 教師30万円 師範50万円 大師範70万円と高価になる。お免状を頂くときには師匠だけではなく、師匠の親師匠、そして家元にもお礼をする。助教以上の免状を持った者は流派の成員となり、会費など流派の諸経費を負担する義務が生じる。

流派 箏には山田流と生田流という2つの流派があり、その中でまた多数の派に分かれている。生田流には正派邦楽会、沢井箏曲院、宮城会、正絃社、筑紫会等がある。流派によって微妙に演奏方法が異なるので合奏は他派とはできない。同じ流派内であっても師匠を変えるのは大変嫌われる。そのため、転居などで稽古場からはなれて住むようになると練習や合奏が難しくなる。流派や師匠の演奏に飽き足りない人は、独立し新しい流派を作る。

楽譜 楽譜は5線符のような統一された形式はなく、流派により違う形式の楽譜を使っている。楽器は同じなので、他の流派の楽譜でも演奏は出来るが、新しい楽譜の読み方に慣れなくてはならず、ハードルが高い。

流派内の人間関係 流派内は家元を頂点とする階層構造になっており、弟子同士は入門が古い順に1番弟子、2番弟子と序列が決まっている。師匠は絶対の存在で、弟子は芸の上でも、建前として、師匠を超えることは出来ない。師匠や先輩は教えるを請うべき存在として序列は生涯変わることがない。

現代の学校の中の伝統的な教育観

現代の学校には、生徒の先輩後輩といった序列意識の厳しさ、学校単位の身内意識、単元学習などが、それぞれ伝統芸能の弟子同士の序列、社中の家族的な結束、免状交付のしかたなどと共通する文化がある。内部の見えにくさも学校と伝統芸能とが似ている部分だろう。そして、この見えにくさは日本の英語教育の悪循環が温存される原因であると同時に、海外からは閉鎖的と非難される要因ともなっている。

まとめ

漢字圏の国やアラビア語圏の国にとって英語は学ぶのが難しい言語だということが調査でわかった。日本人の子供は文字が多くて書き方も複雑な日本語の学習をしなければならないので、他の漢字圏の国の子供たちと比べても英語学習の負担はさらに重いとと言える。この、日本語と英語という学ぶのが難しい言語を二つ学ばなければならないということが、日本人が英語が苦手な一つの原因だと考えられる。しかし、日本に来た外国人留学生たちは若い日本人の英語力に問題は感じていない。他の国に比べ負担が重いとはいえ、英語をマスターするのは努力次第で突破できる壁なのだ。國弘正雄はのアポロ11号の月面着陸の同時通訳で有名な同時通訳者だが、戦時中だった少年の頃、捕虜に話しかけた経験を次のように語っている。

それでね、"What is your country?"と言ったのよ。そうしたらそれが通じたんだよな。そしたらその捕虜、その背の低い捕虜がね、若い捕虜がね、ニコッとさらに笑ってね、"Scotland."と言ったのよ。それで僕はそれがわかったわけよ。ああ！（中略）欣喜雀躍というのかな、もう天にも上るような感じでね、「通じたッ。通じたッ。通じたッ。」
（通訳者と戦後日米外交^{xix}）

この体験が國弘氏のその後の人生を決定づけた。韓国のYさんは、一人の教授との出会いから、苦手だった英語をマスターしたいと思い立った。フィリピンのMさんは、子供の頃見たテレビのアニメから英語に親しんでいった。誰でも外国語は「楽々」とは身に付かない。苦しい勉強をやり抜くには強い動機が必要だ。動機は高賃金の仕事、ステータスや人の尊敬の眼差し、外国の文化へのあこがれ、と人それぞれ違っている。共通しているのは人生のどこかで出会いがあり、その人の人生の方向を決定づけているということだ。日本語の外に別の世界があるということ、感動を持って知ることは、将来子供が厳しい学習に耐えて語学力を獲得する際の心の支えになる。出会いのチャンスは若い頃からあった方が良かったらう。感動の種をまく。そういう意味で小学校の英語教育は大きな可能性を子供たちに与える。また、このような感動は、未知のものに対する好奇心と、それを受け入れる順応性を育む。今後20年の世界は、これまでの20年以上に変化が激しいことが予想される。このような世界を生き抜くには、好奇心と順応性は重要な資質だ。小学校英語教育は色々な面で子供たちの将来にプラスに働くだらう。とはいえ、現在のように小学校の教員への研修も不十分なままに英語教育を強行するのは心配だ。多くの専門家が反対するのも無理はない。

日本の教育の底流には日本の伝統としての教育文化が流れている。その文化は日本人にとって大切なものだからこそ残ってるのだが、日本人が外国語を学ぶにあたっては大きな障害となっている。日本では、お稽古としての英語は人気があるが、仕事に使う英語は現役で働いている人の80パーセントが重要と感じながら何ら対策を講ぜずにいる。これは、日本の学校の教育文化に何か要因があるからに他ならない。それは、中学から大学までの英語教育と教員養成の悪循環の中で温存され、これまで生徒や学生が生き生きとした外国の文化に触れることを阻んできた。今回の小学校英語教育導入にあたっては、子供たちの英語との出会いを感動的なものにするために、日本の学校文化の中の教師たちと、外国人のALTとの間の橋渡しをする人材が必要だ。このような日本語と日本語の外の世界とを取り結ぶ役割は、生き生きとした外国語を体験的に学んできた人々にしか担えない。残念なことに、企業では未だにこのような人材が能力を発揮できないまま放置されている。今後学校の現場で、異文化を体験的に学んだ語学の達人が、どのような立場に置かれるかは、小学校英語教育の成否の鍵となる。このような人々が一人でも多く英語教育の場で実力を発揮できるような環境を作ることが大切だ。そのためには財政面の保証も然ることながら、その人たちの専門性を尊重し、発言に敬意を払い、ともに教育を作り上げる人材としての一般の理解と公的に認められた地位を確保することが欠かせない。以上

参考文献

- バトラー後藤裕子 日本の小学校英語を考える アジアの視点からの検証と提言
2005年8月 三省堂
- 中公新書クラレ編集部+鈴木義里 論争・英語が公用語になる日 2002年1月中央公
論新社
- 中津燎子 何で英語やるの 1978年4月 文藝春秋
- 伊村元道 日本の英語教育200年 2003年10月 大修館書店
- 佐藤秀雄 教育の歴史
- 佐藤郡衛 国際化と教育=日本の異文化間教育を考える=
- 多和田葉子 エクソフォニー 母語の外へ出る旅 2003年8月 岩波書店
- 大修館書店 英語教育Fifty 創刊50周年記念別冊 2002年5月 大修館書店
- 大津由起夫・鳥飼 玖美子 小学校でなぜ英語? 2002年3月 岩波書店
- 大津由起雄 (編) 小学校での英語教育は必要ない! 2005年5月 慶應義塾大学出版会
- 河原俊昭・川畑松晴 アジアオセアニアの英語 2006年11月 めこん
- 滝口優 特区に見る小学校英語 2006年8月 三友社出版
- 辻本雅史 教育の社会文化史
- 鈴木静夫 物語フィリピンの歴史「盗まれた楽園」と抵抗の500年 1997年6月
中央公論社
- 鳥飼玖美子 通訳者と戦後日米外交 2007年8月 みすず書房

参考論文

吉原秀樹 岡部曜子 澤木聖子 韓国企業の国際経営と英語—現地レポート— 2000-5

<http://www.rieb.kobe-u.ac.jp/academic/ra/dp/japanese/dp31.pdf>

吉原英樹 星野裕志 総合商社 —日本人が日本語で経営— 2002-11

<http://www.rieb.kobe-u.ac.jp/academic/ra/dp/japanese/dp46.pdf>

内多充 米国ヒスパニックの経済力

<http://www.iti.or.jp/kiho47/47uchida.pdf>

藤原康洋 文法教授とコミュニケーションについての私見 大阪女学院短期大学紀要第35号2005年9月30日

http://58.12.220.141:8089/kiyo_2005/kiyo_2005/kiyo_35_PDF/2005_07.pdf

中原功一朗 フィリピンの社会・言語状況と同国における英語とフィリピン語の将来 自然人間社会/ 関東学院大学経済学部教養学会 第40号

http://opac.kanto-gakuin.ac.jp/cgi-bin/retrieve/sr_bookview.cgi/U_CHARSET=utf-8/NI10000613/Body/02nakahara.html

フィリピンコールセンター産業調査報告 2006年3月

http://www3.jetro.go.jp/jetro-file/BodyUrlPdfDown.do?bodyurlpdf=05001229_001_BUP_0.pdf2006.1

金美兒 フィリピンの教授用語政策—多言語国家における効果的な教授用語に関する一考察— 『国際開発研究フォーラム』 25 (2004.2)

<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/bpub/research/public/forum/25/index.html>

大石晴美 IT革命児大の英語教育—日本人学生のための効果的な英語教授法の模索— 名古屋女子大学紀要47 2001

小西千鶴子 早期英語教育に於ける諸問題とその展望 立命館大学政策科学部紀要 10巻3号

http://www.ps.ritsumeit.ac.jp/assoc/policy_science/

堀口和久 ESPと経済英語・ビジネス英語 —大学英語教育の観点から— 帝京大学文学部紀要教育学 28:145-164(2002)

<https://apps.main.teikyo-u.ac.jp/tosho/tos4-5.html>

古徳聖子・永井彩子: 相互理解を目指す日本の英語教育 筑波学院大学紀要第1集 139~150ページ
2006年

<http://www.tsukuba-g.ac.jp/library/kiyou/2006/index-j.html>

小林 君江 学ぶ意欲を高める小学校英語 - 友達と楽しく学ぶ学習活動 - 神奈川県立総合教育センター長期研修員研究報告5:57~60.2007

<http://kjd.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/h18kenkyu/html/Cyouken.htm>

矢亀 尋美. 「異文化理解を伴うコミュニケーション能力を高める英語教育」. 『コミュニケーションと言語教育(SURCLE)第3号』, 1-10.

<http://snow.shinshu-u.ac.jp/~surcle/>

巻末注

i インドの主に中部や北部で話される言語で、インドの公用語。表記には主にデーヴァナーガリー文字が用いられる。

ii 出典:「データブックオブ・ザ・ワールド2005年度版」(二宮書店)「世界国勢図会」(矢野恒太記念会)等をもとに作成 注:通常、英語が第一言語であっても、公用語としていない国(アメリカ合衆国、バルバドス等)も含む

iii Estimates of the Population by Race Alone or in Combination and Hispanic or Latino Origin for the United States and States: July 1, 2005

<http://www.census.gov/Press-Release/www/releases/archives/population/007263.html>

iv Netcraft <http://news.netcraft.com/>

v Technorati <http://technorati.com/>

vi ピリピノ語とフィリピノ語 ピリピノ語;フィリピンの国語とするためにタガログ語をベースとして作られた言葉将来フィリピンの国語とする予定だったが他の言語の地域からの反対で出来なかった。タガログ語にはFの発音がないのでPilipinoとよばれる。

フィリピノ語はピリピノ語に他のフィリピン諸言語や外国語の語彙などを加えて作られた言葉で、タガログにはないFの音や、外来語、借用語、外国語の単語そのものを含む言語。タガログ以外の言語の地域の人々に受け入れやすいように新しい言語として作られた人工語。

1987年憲法でフィリピノ後が国語と定められた。フィリピノ、ピリピノ、タガログは政治的な理由で名称を変えたので、実質的にはそれほど変わらない。

公用語はフィリピノ(タガログをベースにした言語)と英語。その他代表的な言葉はセブアノ、イロカノがあるが、フィリピン国立博物館の言語地図(1974年)によると、中国人やスペイン人などを覗くフィリピンの先住民の言語は126に分かれ、方言まで数えると186のグループに分かれるとされている。

vii 顧客サービス・コールセンター事業

フィリピンには米国の顧客向コールセンターが多数進出し2001年に2万人だったコールセンター業務従事者が5年後にはその10倍の20万人と急増した。旧宗主国の米国の文化への適応性が高いこと、幼少時から米語で教育されているので米国流の英語の発音やアクセントになじみやすいという利点がある。フィリピンのコールセンターは100を超え、その市場規模は2005年には前年比90%増の17億ドルと大幅な伸びを示し成長した。

viii 韓国の学校教育制度等 (文部科学省ホームページ)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/015/05120501/006/005.htm

ix ALT: Assistant Language Teacher (外国語指導助手) 小学校、中学校、高等学校、教育委員会に配属され、主に外国語指導の支援をする。学校の外国後の授業で教師の補助をしたり、教材作成に協力したり、教員の語学に関する質問に答えたりする。また、クラブ活動やスピーチコンテストにも協力する。任期は3年。

× 古い英語：There is no rule but has some exceptions.は「例外のない規則はない」と訳すと学校で習う。辞書にも以下のような例文が載っている。しかし、イギリスの辞書には1995年以降記載がない。

辞書	例文	訳
グランドセンチュリー	There is nobody but has his faults.	欠点のない人はいない。
アンカー	There are few but admire his courage.	彼の勇気に感心しない人はほとんどいない。
ルミナス	There was no one there but shed a tear.	そこに涙を流さなかった者はいなかった。
プログレッシブ	There are none of us but respect his honesty.	我々の中で彼の誠実さに敬服しない者はいない。
ジーニアス	There is not one of us but wishes to succeed.	成功を望まない人はだれ一人としていない

Oxford Advanced Learners Dictionary	例文	使用基準
1974年Third edition	There is not one of us but wishes (= not one of us who does not wish) to help you.	rare; formal
1989年Fourth edition	There is no man but feels (i.e. no man who does not feel) pity for starving children.	dated or formal
1995年のFifth edition	例文なし	—
1995年のFifth edition	例文なし	—

英語教育情報誌 WEB Peripato 第1号 学校文法を検証する！ (1)

xi 言語能力レベルは、言語の能力ゼロのLevel0から、最高のeducated native speaker's levelであるLevel 5までの間を11段階に区分されている。これらのレベルを仮にTOEICスコアに置き換えてみると、Level 1は400、Level 1+は500、Level 2は600、Level 3は900に相当する。「英語学習の構造」三枝幸夫
www.eigozai.com/STUDYG/STUDYG_D/STUDYG_5.pdf

xii ウィークリー 黄トンボ <http://www.kitombo.com/index2.html>

xiii 堀口和久 ESPと経済英語・ビジネス英語 —大学英語教育の観点から— 帝京大学文学部紀要教育学 28:145-164(2003)

xiv 吉原英樹 星野裕志 総合商社 —日本人が日本語で経営— 2002-11

xv 毎日放送いま解き 「“エリート初等教育”驚きの授業」 Voice http://www.mbs.jp/voice/special/200707/06_8866.shtml

xvi Voice <http://www.mbs.jp/voice/>

xvii 平成17年特定サービス産業実態調査 <http://www.meti.go.jp/statistics/tyo/tokusabizi/result-2/h17.html>

xviii 教育の社会文化史(2004/03)辻本 雅史 (編集) 放送大学教育振興会 89-98

xix 通訳者と戦後日米外交 鳥飼玖美子 90-96